Absolute Music

桜 みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Absolute Music

【Nコード】

N9941U

【作者名】

桜 みずき

【あらすじ】

私立白麗学園に通う軽音部の日常を綴った物語です。とは言っても『けい◯ん！』を意識して書きましたが、ネタが被らないよう注意してます。

気軽に読んで行って下さい！感想などアドバイス、「ここおかしいよ～」などの指摘も受け付けてます！

プロローグ（前書き）

始めてのオリジナル小説です。
中だるみしないようがんばります！

プロローグ

何故私はこんなことしてるんだろう。

「も〜！ぐずぐずしてないでよ〜！早くセンターに立つ！」

「ふぇ〜…。こんなの聞いてないよ〜ぅ…」

なんでこんなことに……。

「キツく言い過ぎだぞ柏木（かしわぎ）。愛実（なるみ）は上がり症なんだから仕方ないだろ」

「杉坂（すぎさか）君…だったらこれ自体止めさせてくれても……」

「それとこれとは話は別だ」

「ですよね…」

実は今、新入生への部活説明会の真っ最中なのです。誰もが一度はやった事があるんじゃないでしょうか。一番手間が掛かる部活が軽音部なんですよ。って言う豆知識は置いといて…。ただ今問題が発生中なのです！

「やっぱり恥ずかしいよ〜！」

「大丈夫！愛実ちゃん似合ってるぜ〜！」

薄々気づいている人が居ると思うのでぶっちゃけますが……。

「なんでバニーガールの姿で歌わなくちゃいけないの～！！？」

なんとかしてステージの真ん中に立ってあるマイクスタンドの前まで行けることができた。しかし、私を見る一年生達の目が点になっている。

ぶっちゃけ、めっちゃ恥ずかしいです！顔から火が出ます！

『あの～…軽音部さん？早く始めて下さい！時間ないです！！』

生徒会役員の人にマイクで注意された。

「ほら！早く始めるわよ！愛実早く進めて！」

さてと、一段落したところで各々のパートと紹介でもしますかね。

ボーカルは私。相澤愛実です。ちょっとおっちょこちょいなところがありますけど、天然じゃないです。きっと…

次にベースの柏木　沙奈ちゃん。いわゆるツンデレキャラらしいのですが……誰もデレを見たことがないとか。

そしてギターの北村　悠希君。なんと！いまどき珍しいツッコミもボケも両方とも駆使するこの部のムードメーカーです。

最後にドラムの杉坂　章人君。そこら辺に居るイケメンさんです。この部のボケ担当で多少ツッコミができる。本人曰く、「ボケをするなら、そのボケにどうツッコミを入れて欲しいかがなければボケは成り立たない。つまり、一度したことのあ

るボケにはどうツッコミを入れればいいかもわかるだろ」とのこと。
若干エリートっぽく言ってるけど、実際の成績は芳しくない。

それで、MCって何すれば……。

「(とりあえず部の宣伝をすればいいよね?)あ〜…え〜…て、テステスっ……時間掛けちゃってごめんなさい!軽音部です!私達は学校を盛り上げるために設立?……でよかったっけ?まぁいいや。させたクラブです」

私以外『はぁ〜〜…ダメだこりゃ』

「ちょっと皆さん!?酷くないですか!?」
私以外『あぁいいよ続けて続けて』

さっきから皆の対応が酷い件…。

「え、えと…。軽音部の活動は体育祭や文化祭などの様々な行事のテーマ曲を作ってます。例えば、学園祭ならみんなが盛り上がるような曲を。体育祭ならみんなが燃えるような曲を作ります。なので、軽音部はほぼ一年中スケジュールが練習で埋まってるけど、学校を盛り上げたい!学校の為に曲を作りたい!などの要望が出来た人は一度軽音部に入ってみてはどうですか!」

うん!我ながらいいMC?が出来たかな?

さて、じゃあ最後に曲を聞かせて終わりかな?

「それじゃあ最後に「俺の歌を聞けーー!!」」

スコーンッ！

杉坂君が投げたドラムスティックが北村君の後頭部にヒットした。

「いってー！何すんだ杉坂！」

「お前が要らんボケをかますからだ！それにお前は歌わんだろ！」

「アホくさ…」

沙奈ちゃんが呆れながら言った。

「ったく…。スティック取りに行くこっちの身にもなってみろよ…」

「お前が勝手に投げたんだろ！」

「も〜！二人とも喧嘩しないでよ〜！」

二人の喧嘩の仲裁に入り、やっと喧嘩がおわった。

仲裁の役目を果たし、私は正面を向き一年生達を見た。一年生達は呆然としていた。全員死んだ魚のような目をしていて、一年生ひとりひとりから戸惑いの空気が漂っていた。

「どうすんだ！お前のせいで一年達の空気が死んだだろ！！」

「俺か！？杉坂がスティック投げたからこうなったんだろ！？」

「お前のせいだ！死んで詫びろ」

「でけぇ！！一年の空気を殺した代償あまりにもでけぇ！！」

また喧嘩が…いや、どちらかと言えばコントが始まっていた。

「あ~もう、うっさい！！！」

しかし、それは長続きせず、沙奈ちゃんが一喝して杉坂君達のコントが終わった。

「悠希！章人！持ち場に戻れ！愛実。続けて」

「う、うん…。じゃあ最後に一年生達に作ってきた曲きいてね！」

かくして、部活説明会は成功で幕を閉じた。きっと…。そうきっと。

「うん！成功した！そうに違いない！」

と心に言い聞かせた。

プロローグ（後書き）

キャラクター設定？

名前
・相澤（あいさわ）　愛実（なるみ）
身長
・１４７ｃｍ
体重
・内緒です！
血液型
・ＡＢ
誕生日
１２月２４日

第一話「ｌｉｇｈｔ　ｍｕｓｉｃ　ｃｌｕｂ」（前書き）

いや～今日の朝に小説のタイトルのスペルが間違ってる事に気づいたから訂正しました！

正・Ａｂｓｏｌｕｔｅ
誤・Ａｂｕｓｏｌｕｔｅ

まだまだ初心者ですが、精一杯努力しますので応援よろしくお願いします！

では、本編をお楽しみ下さい！

第一話「ｌｉｇｈｔ　ｍｕｓｉｃ　ｃｌｕｂ」

　この学園には様々な行事があります。入学式から始まり、部活説明会、壮行会、文化祭、体育祭などなど…年間通して１５の行事に軽音部の演奏が絡んできます。多分、日本一忙しい軽音部だろうと思います。

　はい。軽音部の活動内容の一部をざっくりと説明しました。皆さんこんにちは相澤です。

　今日はあのカオスな部活説明会があってから一週間経ちました。しかし、入部希望の一年生はまったく来てません。

「（誰のせいだか…）」

　今は放課後で軽音部の部室へ向かってるところです。教室から部室まではかなり遠く、まだまだ時間があるようなのでこの学園について話そうかな。

　私立白麗学園。生徒数は本校生（大学生）約２８００人。附属生（高校生）は約１５００人。全校生徒数約４３００人とそれなりに大きな学校だったりします。それと、私立だけあって寮もあります。女子寮と男子寮で別れていて、互いの寮は異性の出入りは基本的に厳禁。だけど、ここの寮はかなり生徒への待遇良くて、どの部屋にもテレビ、ベッド（二段）、トイレ、冷蔵庫、机、シャワールームが設備されてます。部屋の広さも１２畳と言う十二分によかったりします。ホテルと見間違えるほどのすごい部屋です。そして、何より嬉しい事は部屋代が光熱費以外はなんと無料なのです！ちなみに、部屋一つに生徒は二人。

おっと、そんなことを話してる内に着きました。我らが聖地軽音部の部室です。

「（あれ？部室の前に誰か居る？）」

一人は私よりほんの少し背の高い男子。一般的にショタと言われるような線の細い華奢な体つきに、特徴という特徴がショタとしか言えない普通の男子生徒。アニメやドラマの配役で言うと男子生徒B見たいな？

もう一人は、なんと言うか同性でも目を惹かれるくらいのものすごい美人な女の子だった。かわいさ何処にも見出だせない。ただ、美し過ぎてかわいさが見事に入りえない領域にまで達している。

一瞬、その子と目が合った。しかし、分かってしまった。この子は心に深い傷を負っているのだと…。この子の目は何処かさみしげで、はかなげで…。硝子細工のように丁寧に扱わなきゃすぐに壊れてしまいそうな、そんなはかない目をしていた。

私はその子に声を掛けられた。

「あの……軽音部ってこちらであってますよね？」

とても澄んだ声だった。

私の心はもうこの子に向いてしまっていた。

「あの…」

「ふぇ！？あ、あ～ぁ！ごめんね！軽音部で合ってるよ。入部希望？」

危ない危ない！私はそっちの気は全くないから！

「（危うくアブノーマルになるところだった…）」

「はい。そうです。やっと軽音部さんに会えてよかったです。もう少ししたら帰るところでした」

「そっか！よかった～！」

「部室に着いたとき、勢いよく三人の部員さんが出て行っちゃってどうしようかと思いましたよ」

沙奈ちゃん、北村君、杉坂君、あなた達はいずこへ…。

男の子から衝撃の事実を聞いたよ…。何やってるんだか…。

「とりあえず、入部済ませちゃおっか」

そういってこの子達を部室招へき入れた。

「（沙奈ちゃん達より後に入部したのになんで私が部に積極的なんだろう…。あれだから仕方ないか…）」

先が思いやられるよ…。

第一話「ｌｉｇｈｔ　ｍｕｓｉｃ　ｃｌｕｂ」（後書き）

キャラクター設定？

名前
・柏木（かしわぎ）　沙奈（さな）
身長
・１５９ｃｍ
体重
・教える訳ないでしょ！
血液型
・Ａ
誕生日
・６月１０日

第二話「join a club」(前書き)

ノリに乗ってましたけど、ただの改正版ですので一度読んだ方は読まなくても大丈夫ですよ！

では、本編をお楽しみ下さい！

第二話「ｊｏｉｎ　ａ　ｃｌｕｂ」

二人の入部手続きを終わらせそろそろやりたいパートでも聞こうかなと若干緊張しながら、先輩であるがために自分の責務を貫き通そうと頑張ってる相澤です。

「とりあえず二人のこと知らないから、自己紹介とやりたいパートを教えて欲しいな（慣れない仕事ほど苦しいのはないよ…。みんなに会ってから少しは大丈夫になったけど…）」

「はい。ぼ、僕は仲山（なかやま）　秋火（あきほ）って言います！お、女の子に見えるし、女の子みたいな名前ですけど男です！ちなみに僕はシンセサイザがやりたいです！」

本当に本人の言う通り、線が細く華奢な体つきに少し幼さが残る綺麗な小顔。髪の長さは男子にしては少し長めなショートとセミロングの間くらいな長さ。声も女の子みたいに結構高い。例えるなら、ＶＩＰ〇長かな？

「つまり仲山君は男の娘なんだね！」

「いや！多分先輩が言ってるのは多分意味が違います！男の娘じゃありません！男の子です！！」

「はい次！そこの女の子！どうぞ！！」

突然北村君の声がしたので振り返ると勢いよく部室から駆け出していった三人だった。

「えー！！スルーですか先輩！？僕の力説はスルーなんですか！？」

「へっ…！男には興味ねぇぜ！！」

なんですと！？

北村君……今なんて…？

「き、北村君！！かわいいは正義だよ！だってショタだよ！見てもなんとも思わないの！？」

「思ったら思ったで色々危険だろ！？」

なんて事だ！由々しき事態です！！

「それに俺は今、その娘の方が気になるぜ！色々と知りたいぜ！」

「え…」

「色々と…」

「知りたい…？」

私・沙奈・杉坂『え～…』（ドン引き）

「別にいやらしい意味じゃねぇよ！？」

これ以上は北村君がかわいそうだから止めてあげよう。

ん～♪私って優しい～♪

「いぃか北村」

杉坂君が北村君に話し掛けるなんて珍しいこともあるんだなぁ。いつもはツッコミから入ってるから、厳密に言うと北村君から話し掛けることになるからね。

「この日本には約１億２千万の人間がいる」

「ほうほう」

「その中でも約７５％は２５歳以上だ」

「ほ～う」

「しかもだ！男の割合なんて４９％」

「で？」

「まだ解らないのか！？ショタって生き物は日本の１１．８％のほんの一握り…いや、ほんの一つまみの人数しか居ない天然記念物なんだぞ！！それでもお前は男か！？精神疑うぞ！？今すぐ病院行けよ！！」

「しるか！お前の方がどうした！？精神疑わしいのはお前だと言うことに気づけ！このゲイ！！」

こんなカオスな状況に怯える二人。

「大丈夫だよ。いつもの事だから」

その二人を必死に宥める沙奈ちゃん。

なんとも自己紹介しづらい環境なんだろう…。

「えと、とりあえず四人だけで自己紹介しようか」

ＢＧＭが後ろ二人のコントと言うなんともやりづらい環境なんだろう…。

「じゃあお願い」

「は、はい！」

沙奈ちゃんにあおられ自己紹介を始めた。

「わたしの名前は神稲（くましろ）　恋（れん）です！何の取り柄も無いですけどよろしくお願いします！や、やりたいパートはギターです！」

この美しい後輩ちゃんの名前の名字は特別な読み方だね！

さてと、自己紹介も終わって三人も帰ってきた事だしあの事を聞かなければ……部長として！…………あれ？みんな初耳！？

次回へつづく！！

第二話「join a club」（後書き）

キャラクター設定？

名前
・北村（きたむら）　悠希（ゆうき）
身長
・182cm
体重
74Kg
血液型
B
誕生日
9月28日

第三話「ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ　Ｉ」（前書き）

すみませんかなりの間が開いてしまいました。書いてたら長くなる事がわかったのでシリーズとして区切り区切り『理由』の方は続けて行きます。

まずは相澤さんの過去話です。相変わらず1話1話が短くてすいません。

では、本編をお楽しみ下さい！

第三話「explanation Ⅰ」

皆さんどうも白麗学園附属軽音部部長の相澤です。前回はぶっちゃけちゃいましたね。

今回は私の苦労話と私の可愛い部員達の言い訳を話し、聞くことにしよう。

まずは一年前の話を……。

・・・・・・・・・・

「えっ！合唱部ないんですか？」

「ああ。去年潰れたみたいだな」

「そうですか…」

私は「失礼しました」と律儀に頭を下げ職員室を出た。

「廃部か…」

皆さん初めまして。あいさ……あ、すいません！なんでもないです。初めてじゃないんだ。過去話…過去話…。

改めまして、皆さんこんにちは。相澤です。

いきなり壁にぶち当たりました…。私が入りたかった合唱部が廃部になっていたそうです…。

「ん？」

廊下の掲示板に貼られていたとある部活の紹介文。不意にその紹介文に目を奪われた。

――軽音部――

やる気のある人募集。

出来ればボーカル志望の奴来いや。

１－Ｂ　杉坂　章人

ただ、そう書かれていた。走り書きでかなり汚い字で。

でも、これは私の推測だけど、多分この人は本当にやる気のある人が欲しいんだなぁ～、と思えた。

字が汚いのは多分わざと。本気でやる気のある人を募集してるのも本当だろう。

字が汚いと言うことは、じっくり見なきゃ読めないし、じっくり見る人なんて本気で入りたい人しか居ない訳ですからね。

この人、かなり考えてる。だけど――

「何処に行けば良いのかな？」

詰めが甘ぃ！

・・・・・・・・・・・

時は流れ、翌日。

昨日はあれから1時間杉坂さんを探したけど見つからず、部活に入ってない人の下校時刻になってしまいましたが、今日は大丈夫です。今は昼休み。１－Ｂに行って杉坂さんに会えば大丈夫なはず！

「（いざ、出陣！！）」

「あの、すみません」

私はそこら辺に居るＢ組の方だと思われる男子に声をかけた。

「ん？何？」

「す、杉坂章人さんを呼んで下さい」

「おっけー。ちょぃと待ってて」

私は控えめな感じで１－Ｂの男子に杉坂さんを呼んで貰った。

「おーい！章人〜！お前の彼女が呼んでるぞ〜！」

一瞬にして静まり返るＢ組の空気。って！

「ち、違いますよ！そ、そそそそんな彼女だなんて！？杉坂さんに用があるだけです！！」

顔を真っ赤にしながら私は言った。でも…。

「章人ー！ごめん！彼女じゃねぇわ。告白するみたいだから来てやれ！」

「だから！違います！もぉ〜！杉坂さん出てきて下さい！！」

教室の奥から長身の人が出てきた。

「ごめんごめん。飯食ってたから時間かかった。で？何の用？」

教室＋廊下からの無数の視線。実際は聞こえないけど、『じ〜っ』って聞こえてくる感覚。あまりにも緊張しちゃって……。

「場所変えて良いですか？」

チキン発言をしてしまいました。

「まあ、確かにここじゃ告白はしづらいな」

「だから違いますって」

第三話「ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ　Ｉ」（後書き）

キャラクター設定？

名前

・杉坂（すぎさか）　章人（あきと）

身長

・１８９ｃｍ

体重

・７６ｋｇ

血液型

・ＡＢ型

誕生日

５月３日

第四話「explanation?」(前書き)

明日からものすごく大変な一週間が始まります。まあ、内容は活動報告で話した通りですけどね。

そんなことはさておき、本文をお楽しみ下さい。

今回は台詞多めになっちゃいました♪

第四話「ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ　？」

「やっぱり告白するんじゃねぇか」

「断じて違います。シチュエーション的にものすごいフラグが建ってますけど、断じてそうではないです」

「フラグ？」

杉坂さんに対して変な用語を使ってしまった…。恥ずかしい…。

「いえ、聞かなかったことにしてください…」

さて、皆さんおはこんばんちわ。相澤です。

ただ今、杉坂さんと学校の屋上に居ます。みんなの視線が怖くて逃げ出してきました。

「で？何の用？告白なら早くしてくれ。ＯＫしてやるから」

「だからっ！違いますって！！」

顔を真っ赤に染めながら否定する。

「確かに、屋上＋呼び出し＋二人きり＝告白という解釈はできますけど…」

「じゃあ何よ？」

杉坂さんは意外と鈍いみたいだ。

「（告白以外なら部活のことに決まってるじゃないですか…。）」

私は鈍い杉坂さんに分かるようにストレートに答えた。

「軽音部についてですよ！」

「何っ！？まさか、入ってくれるのか！？」

私が軽音部の話を持ち出した途端、目の色を変えて話に食いついた。

よっぽど部員が欲しかったのか、目をキラキラさせながら喜んでいた。

「はい。私が入りたかった合唱部が去年廃部してしまったらしくて…。仕方なく途方に暮れていたら、軽音部の紹介文が目に入ったんですよ。それで、ボーカルに困ってるみたいなので私でよければ入れて貰えないかと」

「そうか。声いいし、やる気ありそうだし、可愛いから採用ね」

「はい！って、えぇ！？良いんですか？私なんかで！？」

駄目元で聞いたつもりがまさかの採用。この上ないくらい嬉しい出来事だ。

でも、本当に私なんかでボーカルが勤まるのか心配です。

「なあ」

「はい？」

杉坂さんが唐突に話かけてきた。お互いに向き合っていたので、改めて話をするとなれとだんだん気分が悪くなってきた。

私は人前ではかなり緊張してしまう、俗に言う上がり症の持ち主である。

そして私は不意に話をかけられたことで今の状況がやっと把握出来た。

男の人と二人きり？そういえばそうだった…。やばい…。意識が……。　そこで私の意識はシャットダウンした。

・・・・・・・・・・

目が覚めると保健室のベッドに寝ていた。

長い間寝ていたのか、さっきまで青かった空は赤黄色に燃えていて私の目に広がるものを綺麗に赤く染めていた。

「起きた？」

不意に声をかけられ、横を見てみると杉坂さんがいた。

私は頭の上まで毛布に潜り、頭の整理を始めた。

「（な、ななな何で杉坂さんがいるの？さっきまでずっと見守ってくれてたってこと！？どうしよう！どうしよう！なんかすごく嬉

しい！ わからないけど何故か！ 何故か嬉しい！？ なんで！？ なにが！？〜〜〜〜っ！！）」

私は自分の頭の中が壊れそうになったので、現実と向き合うことにした。

毛布から顔を…といっても鼻が見えるくらいだけど、出して杉坂さんを見る。

「おはよう」

「う…うん。おはよ…」

今はそんな時間じゃないけど…。

「なあ、さっきの…といっても昼の続きだけど…」

「う、うん」

杉坂さんが何かを言う前に倒れてしまい、言えなかった事を言うんだろうな。でも、もじもじしていっこうに言葉が出ない様子。

「あ…ぅう」

「ん？何？」

「相澤…」

私の名前？調べたのかな？

「す…」

「す？」

「あ〜もう！こんなん俺じゃねぇ！！」

突然立ち上がって大声で言う杉坂さん。

「相澤！俺、相澤が好きだったんだ！！ずっと！ずっと前から！」

私がその言葉の意味を理解するのに１０秒もかかってしまった。

つまり、どういうことか杉坂さんは私のことがずっと前から好きだったらしい。……え？

「えぇえええええええええ！！？？」

第四話「ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ　？」（後書き）

キャラクター設定？

名前
・仲山（なかやま）　秋火（あきほ）
身長
・１６２ｃｍ
体重
・４６ｋｇ
血液型
・Ｏ型
誕生日
１月１０日

第五話「explanation？」（前書き）

前回の続きです！

さて相澤さんはどうなる！？

ベッタベタな内容になっちゃいましたけど良ければ読んで下さい！

第五話「explanation?」

皆さんこんにちは。相澤です。大事件です。なんと…なんと私、告白されました！！

しかも、今日会ったばかりの男の子にです。

とりあえず、私はベッドから降りて杉坂さんと向き合う。こうしないといけないと思ったのだ。

「え、えと…なんで急にそんなことを？今日会ったばっかりなのに…」

私は少し戸惑いながら、そして、告白されたという嬉し恥ずかしさで顔を真っ赤に染めて聞いた。

「違うよ。相澤には何回も会ってる」

「え？」

杉坂さんと会った覚えはない。それどころか、『杉坂』という苗字を見たのも昨日が初めてだ。それは断言できる。

「岩崎（いわさき）って言えばわかってくれるか？俺は岩崎　章人のときに相澤を助けたんだ」

日本語的には少しおかしいけど必死さはしっかりと伝わってきた。本気で私のことが好きなんだと思った。

そして、思い出し、理解した。杉坂さんは私の初恋の人だ。

誰にも恋をしないで育って来た13年間。初めて恋をしたのは中学一年生のとき。初めて好きになった人の名前がが岩崎　章人と言う人。その頃、内気で根暗だった私はいじめられていたのだ。そんな私を助けてくれたのが岩崎さんだったのだ。でも、二年の半ばに転校してしまい、私の前から居なくなってしまったのだ。

その次の日からいじめは再開された。でも、私は必死に耐えた。岩崎と言う人との約束を果たすために。

「岩崎さん…？本当にあの岩崎さんなの？」

「そうだ」

その真剣な眼差しはとても嘘を吐いてる人の瞳には見えなかった。

初恋の人が目の前に居る。

私は杉坂さんに抱き着いた。

「会いたかったよ…」

岩崎さん…もとい杉坂さんはすごく背が高くなっていた。転校する前は私と10cmくらいしか高くなかったのにいつの間にか40cm以上も違く、顔が胸までしか届かない。

「俺もずっと会いたかった。相澤に会えなくて毎日が苦痛だった。約束は守れたか？」

杉坂さんも私を軽く抱いて頭を撫でてくれた。

約束とは別れ際に交わした事だ。とは言っても私が勝手に言った言葉だが…。『絶対に何があっても泣かない！約束するから！だから…！絶対に帰って来て！』そう約束したのだ。

私は杉坂さんの胸に顔を埋めながら言った。目から流れてくる涙を見せないために。

「私もそうだった。毎日が辛かった…。でも、ちゃんと約束は守ったよ。何があっても泣かないでいれたよ……」

「そうか。相澤は弱虫なのによく頑張ったな」

「杉坂さん」

「何だ？相澤」

「………あのね…その……」

言えない。たった一言なのに。ずっと言いたかったのに…！なんで言えない！言え！言うんだ私！

「わ、私も！私もずっと…ずっとずっとず〜っと好きだった！杉坂さんのこと一時も忘れなかった！忘れることなんてできなかった…！」

言えた…。今まで胸の奥にしまい込んでいた言葉を言うことが出来た！

「俺だって相澤のことを忘れなかった！俺も好きだ！」

杉坂さんが私の顎を持ち私を見つめる。

私も杉坂さんを見つめ言葉を漏らした。

「杉坂さん…」

「相澤…」

私達はお互いの唇を合わせた。

初めてのキスはとても甘い感じがした。

唇を離すと杉坂さんは私を見つめて言った。

「俺は相澤が好きだ。そして、相澤も俺が好きだ。だから、付き合ってくれ」

二度目の告白を受けた。当然答えは……

「はい。これからもよろしくお願いします」

私は満面の笑みでそう答えた。

初恋は実らないとよく言われるけど、実る初恋もあるんだと私は思った。

第五話「ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ　？」（後書き）

キャラクター設定？

名前
・神稲(くましろ)　恋(れん)
身長
・１６０ｃｍ
体重
平均よりは下です。
血液型
・Ａ型
誕生日
１１月１４日

第六話「ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ　？」（前書き）

０時に間に合わなかった……。

０時で待機していた方に本当に申し訳ないです…。すいませんでしたｍ（＿　＿）ｍ

では本文をお楽しみ下さい！

第六話「ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ　？」

「学校では名字で呼び合う！友達程度の距離感しかとらない！」

どうも皆さん。相澤です。彼氏が出来ました～♪

でも、皆さん知っての通り私は上がり症です。あまり注目はされたくない訳です。そこで！

「学校の皆には私達が付き合ってることは内緒にしましょう」

という事で、杉坂さんと話し合いをしています。

「そうか。でも、いつイチャつくよ？軽音部入るから寮生活になるし、寮の門限が１８時だイチャつく暇がない」

そんなことは決まってる！

「寮でイチャつく！」

「言うようになったねぇ。女子寮と男子寮に別れてるんだ。しかも、男子が女子寮に入れないように、女子だって男子寮に入れないんだぞ」

「男装して入る！」

「無理だ。愛実は可愛いからすぐにばれる」

「～～っ！！も～…なんでそんな恥ずかしいこと真顔で言えるの～

…」

顔を真っ赤にしながら言う。

「そんなの愛実を愛してるからに決まってるからだろ」

その言葉に私は本当に愛されてるんだなと改めて思う。

ちなみに、二人のときは必ず名前で呼び合うようにしました。

「章人さん…」

「愛実…」

お互いを見つめ会う。そして、お互いの顔を近づける。

「ふ～ん。お二人はそういう間柄だったんだ～」

『！！』

第三者の介入により私達の行動を遮られた。

横に顔を向けると髪の長いツインテールの女の人がいた。

「部活サボって何してるかと思えば……女の子と逢い引き？いい度胸してるじゃない杉坂！」

そう言って章人さんの股間を蹴り上げる。

「ふごっ……！！！！」

鈍い音が響き、章人さんはその場に股間を手で押さえ崩れ落ちた。

「章人さん大丈夫！？」

私は章人さんを蹴った女の人を睨みつけた。

「なんてことするんですか！！」

「あっ！彼女さん居るの忘れてたわ。大丈夫。いつものことだから。多分私に蹴られても、〇ってるから」

「〇たねぇよ！」

「そうですよ！崩れ落ちるくらい痛がってるじゃないですか！」

「まあいいわ」

『よくないです（ねぇよ）！』

「とりあえず杉坂。新入部員が見つかったんでしょ？早く会わせなさい」

私達の事はお構いなしに話を進める女の人。

「新入部員なら目の前に居るぞ」

「えぇ！彼女さんが新入部員だって！？」

・・・・・・・・・・・

「名前は？」

「あ、相澤　愛実です…」

「特技は？」

「え、えと……特には…」

「軽音部（ここ）ではボーカルをやりたいと？」

「は、はい！そうです！」

「そう」

軽音部の部室に連行されるやいなや「適性審査をするわ！」と言われ、今は質問の嵐です。

ちなみに章人さんは女の人にパシられて、白麗の近くにあるパン屋さんまでレモンパンを買いに行ってます。

「あの～…私からも質問良いですか？」

「何？」

「あなたの名前を教えてもらえませんか？」

「私は柏木　沙奈って言うわ。ちなみにベース担当。これからもよろしくね」

私はその言葉の意味理解し、嬉しさのあまり抱き着いてしまった。

「ありがとう沙奈ちゃん！　こちらこそよろしくね！」

第六話「ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ　？」（後書き）

次回で相澤さんの過去話終了です。何故相澤さんが部長になったのか……過去話の核心についていきます。

てか、無駄話多かっただけか……。

第七話「ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ　？」（前書き）

一日に二回の投稿です。

疲れた〜。

疲れてたせいかなんか文章力が低下してますが、愛嬌でカバーしてください。

では本編をお楽しみ下さい！

第七話「explanation?」

バサッ！と部室の入り口で何が落ちた音がした。
振り向いて見ると、髪が長い（と言っても肩にかかる程度）の男の人が呆然と立ち尽くしていた。
「あ、悠希おかえり」
悠希さんと呼ばれるこの人が軽音部の最年長者らしい。今は二年生だとか。
入り口に立っているその人をよく見てみると小刻みに震えていた。
「か、柏木…」
「何？」
「お前…そっちの趣味――――がはっ…！！」
「無いわよ！勘違いしないで！」
状況を掴めていない方が大多数いると思うので状況説明をします。
悠希さんと言う方に向かって沙奈ちゃんが下履きを蹴り投げたんです。それが悠希さんのみぞおちにヒット。肺に貯まっていた空気が「がはっ…！！」って抜けた訳です。
沙奈ちゃん怖い…。涙出てきちゃった。

それ以前に沙奈ちゃん年下なのにタメ口…。

「あら？ドア開いてるよ。柏木。買ってきたぞ━━━うぉっ！！」

変なタイミングで帰ってきた章人さん。入り口の近くで地に手と足を着いてる悠希さんにビックリしていた。

「悠希！何やって……る…んだ…？」

状況説明。私、涙目&沙奈ちゃんに今だに抱き着いたままだったりとかする。沙奈ちゃん、悠希さんに蔑みの眼差し。悠希さんの近くには沙奈ちゃんの下履き（片方）が。

勘違いするには十分な状況です。

「この犯罪者がぁあああ！！」

「なんでだーっ！！」
章人さんも先輩への態度が尋常じゃないんですけど…。

・・・・・・・・・・

「じゃあ自己紹介ね」

結局あの後、私が章人さんの誤解を解いて今に至ります。

「俺、北村　悠希な。今後ともよろしく」

「は、はい！私は相澤　愛実と言います。よろしくお願いします」

私は深々と頭を下げた。

「へぇ～。愛実ちゃんて言うんだ～。良い名前だねぇ。今度二人でカラオケ行か──いで！」

北村さんの誘いの最中に杉坂さんと沙奈ちゃんが北村さんの頭を殴る。

「ったく…！いい加減ナンパ癖どうにかしなさいよ！」

「あんま調子にのんじゃねぇよ」

どうやら北村さんはこの部じゃボケキャラなのかな？

にしても、二人の態度……私には無理かも…。

「さて！時間無いから進めるわよ！」

沙奈ちゃんが仕切って部活のミーティングを始めた。あの…顧問の先生は？

「今のところ部員４人と顧問１人居るから部活の申請が出来るわ！」

おお！顧問の先生ちゃんといるし、軽音部がやっと部として認められるんだ！……って！

「認められてなかったの！？」

初耳なんですけど！

「愛実はちゃんと部活説明会見てたの？　軽音部の説明なかったでしょ」

「ごめんなさい。休んでました」

「まぁいいわ。とりあえず！　部活の活動方針を決めていくわ！　何か良い案ある？」　たしか、白麗は学校にとって何らかの意味を持たせる部活じゃなきゃいけないんだっけ？　文化系だけ。

　なら……。

「学校の行事、と言っても文化祭とかのテーマ曲を自分達で作ります。とかどう？」

「採用。でも、これだけじゃ弾かれるから他にもいろいろと行事突っ込んどくわ。じゃあ次！　部長と副部長決めるわ」

　そういって沙奈ちゃんは私を見た。そして視線を申請用紙に戻す。

「部長、相澤　愛実…と」

「えぇ！　私！？　む、無理だよ〜！」

「愛実。じゃんけん」

「？　じゃんけんぽん」

　グーを出して負けた。

「愛実に決定」

「なんで私なの！？　杉坂さんとか北村さんとかも居ますよ！」

そして、二人が居る席を見ると……居ません。どっかに行きましたとさ。

「二人をどうにか出来る権力を持ってた方が身のためだと思ったからよ」

そんなこんなで私は部長になりました。

第七話「explanation？」（後書き）

過去編終了～！

でいいのかな～？
終わり方がぬるいなぁ

ま、いいか。
次回から時系列を元に戻します。
これからも長く付き合ってくださいね！

第八話「ａｐｏｌｏｇｙ」（前書き）

やっと旅館のお手伝いが終わり自由を手にしました！
ホントに疲れた…。
でも、楽しかったです！
大学落ちたら旅館で女将として働くのもいいかな…。

そんなわけで本編をお楽しみ下さい！

第八話「ａｐｏｌｏｇｙ」

どうも皆さんこんにちは。相澤です。

まあ、一年前はあんなことがあった訳ですよ。今では学校の中だけ私は『杉坂君』と呼んでいます。ちなみにこの学校で私と章人君が付き合ってると知ってる人は沙奈ちゃんしかいません。私が知ってる中ではですけど…。何故北村君にはこの事を知らせてないかと言うと、口が軽そうだからです。

さてと、話を元に戻しますか。今はとても気になることがありますので。

「なんで三人は部室から出て行ったの？」

理由が知りたい。気になる。どんな面白いことがあったのか…！

「わかったわ。それについては私が説明するわ。こいつら二人は真実を捩曲げる気がするからね」

という訳でまたまた回送入ります。では、後ほどまたお会いしましょう。

・・・・・・・・・・

「なんで部活説明会から一週間が経つのに一年生が一人もこないのよ！」

私はここ二日間溜め込んでいた不満をついに口にした。独り言…にしては声が大きすぎたせいで部室に居るアホ二人にも聞こえててし

まった。

「ホントにね。何がいけなかったんだ？演奏は完璧だったし、相澤もほぼまったくと言っていいほどちゃんと音はとれてたのにな」

まあ、反省すべき点はそこじゃないんでしょうけど…。あ、言い忘れてたわ。ここから少しの間は柏木がナレーションを務めさせて貰うわ。

「まあ、もうそろそろ誰かがそのことを愚痴ると思ったので…」

悠希が何か鞄から大量の紙を取り出した。目測で２００枚はある。

「一年生１００人に聞きま――がはっ！！」

私はいつの間にか下履きを悠希のみぞおちに蹴り投げていた。

「あ、ごめん。つい。まあいいわ。続けて」

「お、おう…。一年生１００人に聞きました。『何故、軽音部に入らないのか』」

いつの間に調べたのよそんなくだらないこと。

「まあ、ほとんどの回答が『他の部に入るから』だったけど、他の回答もちゃんとあったからそっちを読んでみる」

「なるほど。じゃあ、一番足引っ張ってる奴が誰だかわかるな」

章人、その勘違いは甚だしいと思うわよ。

「はい、一枚目！『めんどくさそう』」

「素直にやる気ないって書けばいいじゃない！」

「んじゃ、二枚目。『ギターの人が怖い』だそうだアホ」

「こんな奴のどこが怖いんだかね…」

「あんたら先輩に向かって酷くねぇか！」

ならもっと先輩らしいことしなさいよ。

「三枚目ね。『ベースの人が怖い』」

ビリッ！

私は破いた紙をごみ箱に捨てた。

「なあ、今「三枚目！！」」

私は違う紙を手に取り、紙の内容を見る。

『ベース持ってた女の人が怖い』

ビリッ！

私は破いた紙をごみ箱に捨てた。

「なあ「三枚目！！」」

私は違う紙を手に取り、紙の内容を見る。三度目の正直か、二度あることは三度あるかどっちか！

『ベースの人怖い』

ビリッ！

私は破いた紙を（ｒｙ。

「現実見ようぜ」

章人と悠希は私の肩をポンと優しく叩き言った。

私はその行為に……。

「………ってない」

「は？」

「慰めになってないわー！！」

私はその行為に怒りを覚えた。

章人・悠希『なんでキレたー！？』

二人は部室の外へ逃げてった。私も二人を追うため部室を出た。

「待てコラぁあああ！！」

第八話「ａｐｏｌｏｇｙ」（後書き）

あれ？ 柏木さんがツンツンっ娘じゃなくて暴走っ娘にしか見えない！？

書いててそう思いました。

第九話「club activities ?」（前書き）

最近暇だな〜。
旅館のお手伝いが今では愛おしいです。
では、本文をお楽しみ下さい！

第九話「club　activities　?」

「なるほどね～。珍しく沙奈ちゃんが悪いんだね」

沙奈ちゃんから代わりナレーションは私、相澤に戻ります。

さて、今は沙奈ちゃんに説教をしなきゃいけないときなんですよね。

でも……

「私は悪くないわよ！悪いのは一年生のゴミ共よ！」

断固として自分の非を認めないようです。

私は部室のごみ箱を漁ってみると、確かに『ベースの人が怖い』書かれた紙が10枚近くあった。その内の3枚はビリビリに破かれていた。他にどんなものがあるか漁ってみると、『相澤先輩ハァ…ハァ…』とか『相澤先輩付き合って下さい！』とか書かれた紙が目に入ったけどスルーした。怖くなったのでこれ以上漁るのはやめにした。

結論を言うと……

「うん。一年生が悪いね」

迷いなく私は答えた。

「でしょ！?」

「でも！！」
私は続けた。
「北村君はともかく、杉坂君も巻き添えにすることはないんじゃないかな！？」
「俺はどうで――」
「北村君は黙ってて！今は沙奈ちゃんとお話してるの！邪魔しないで！！」
「す、すいませんでした…」
私は北村君を黙らせて話を続けた。
「杉坂君はなにも悪くないでしょ？なのに、杉坂君にまで八つ当たりして！恥ずかしくないの！？」
「恥ずかしくないわよ！！」
私がそこまで言うと沙奈ちゃんが反論してきた。
「こいつらがいけないのよ！私を哀れむから！私は哀れみが大っ嫌いなのよ！」
その言葉に私はもう堪えられなくなった。私の頭のなかで何かが切れた。

「そんなこと知るかー！！！！」

「っ…！」

私が一喝すると、沙奈ちゃんが怯えてしまった。いつも強気な沙奈ちゃんが怯えていた。

「そんなこと知らないよ。沙奈ちゃんがどう思おうと沙奈ちゃんの勝手だよ。だけど、人の好意を台無しにするのはどうかと思うよ」

私は声を荒げはしなかったが、はっきりと力強くそういった。

「じゃあ、どうすればいいの？私は人並み以上に不器用なのよ…。自分の感情すらコントロールできないのよ…！だから……そんな綺麗事しか言わない愛実なんて大っ嫌いよ！！」

「え？沙奈ちゃんっ！！」

そう言い残して沙奈ちゃんは部室から出ていき、どこかに行ってしまった。

・・・・・・・・・

さて、またナレーションが代わるぞ。ここからは杉坂、俺がナレーションをする。よろしく～。

「私、何か悪いこと言っちゃったかな…」

なんでこんなことになっちゃったかね～。

「愛実ちゃんは悪くないよ」

北村が愛実をなだめる。北村にしては気が利くな。

「北村君……私、沙奈ちゃんに嫌われちゃったかな？」

「大丈夫！愛実ちゃんは嫌われてないよ！沙奈ちゃんを追って仲直りをするんだ！」

「うん！」

「早く行くんだ！」

「はい！」

「（これなんて学ドラ？）」

そんな事を思っていると、後ろから申し訳なさそうに肩を叩かれた。

振り返ってみると新入部員がいた。

「あの、ここって本当に軽音部ですか？」

秋火がそう聞いてきた。確かに聞きたい気持ちは分かる。

「大丈夫。ここは演劇部じゃなくて軽音部だ。心配すんな」

にしても…。

「（どうしてこんな大事になってるんだ？）」

俺は心の底からそう思った。

第九話「club activities ?」（後書き）

本当にどうしてこうなったｗ

タグにガールズラブを入れた方がいいかな～？

皆さんどう思います？

第十話「make it up」(前書き)

だめだ！文才がほしい！こんなにクオリティーが低いのしか書けない…！

勉強が足りないのか…！

てなわけで本編へどうぞ

第十話「make it up」

「私のバカ……ホントにバカ…！」

皆さんどうも柏木よ。テンション低くて悪いわね。みんな知っての通り私は愛実に酷い事言っちゃったのよね。

「絶対愛実に嫌われた…」

私の心はその事でいっぱいだった。

そして、心に安らぎを求めるため、とある場所にいる。ここはとても良い場所。昔から過ごしていたが、去年離れた場所。自分の家。その中で自室が一番落ち着くし、一番安らぐ。悲しいことや、寂しいことがあったらよく引きこもって泣いたものだ。

「7時か…今頃みんなは大食堂で夕飯食べてるんだろうな…」

た〜た〜た〜たらたたた〜た〜♪

不意にケータイが鳴った。章人から着信が着たようだ。

「もしも――」

『柏木！！今何処に居る！？』

私が電話に出た瞬間、章人が声を荒げて言った。ただ事ではなさそうだ。

「自分の家だけど…。どうかしたの？」

『愛実には会えてないか…』

「（愛実に会えてない？）どういうこと？」

『いいか？落ち着いて聞けよ』

「な、なによ…」

『愛実がまだ寮に帰ってないんだ』

「え…？」

・・・・・・・・・・・

「はぁ…はぁ…」

北村君に言われて沙奈ちゃんを探してますけど……見つからない。

「（そういえば、ここはどこ？）」

必死に沙奈ちゃんを探してたから、気づかない内にまったく知らない場所にいた。

まず最初、学校を探し回った。見つからない。

寮に居るのかと思い、寮に行ったが、居ない。

そして街に出て探し回ってたわけだが、自分の居る場所がまったくわからないのだ。

「ケータイと財布、鞄の中だ…」

道を聞くにもそんな勇気は私にない。

時間はもう夜の10時だ。眠たくてしょうがない。

私は寝床を確保するため公園を探し始めた。

そのとき、

「愛実！！」

後ろから私を呼ぶ声がした。

「沙奈ちゃん？」

振り返れると沙奈ちゃんがいた。

「沙奈ちゃん…！」

私は沙奈ちゃんに会えた嬉しさのあまり抱き着こうとした。

だが…

「ぁいたっ！」

沙奈ちゃんに頬を張られた。左側の頬がジンジンと痛む。

「愛実のバカ！！何考えてるのよ！」

何考えてるって…

「それは…沙奈ちゃんと仲直りしたくて…。その…ごめんなさい！」

私は深々と頭を下げ、全力で沙奈ちゃんに謝った。

「なんで愛実が謝んのよ…！悪いのは私でしょ…！！」

正面を向くと沙奈ちゃんが泣いていた。

「え？え？えと…え？」

私はビックリして何を言っていいかわからなくなった。

「愛実のバカっ！私以上にバカっ！！私なんかのために6時間探さないでよ！しかもこんな街中にまで来て！見つからないかもしれないじゃない！」

「ごめんなさい…」

「ごめんなさいで済むわけないじゃない…！このバカぁ！！それに、悪いのは私なのになんで謝ってるのよ！ホント信じられない程バカ！」

「うん。ごめんね」

「だから謝るな！もう！私が悪かったわよ！もういいでしょ！だから！！」

沙奈ちゃんは涙を拭き、私を見た。

「一緒に帰るわよ！」

微笑みながら沙奈ちゃんはそう言った。

第十話「make it up」（後書き）

新入部員達の不遇さをどうにかしたい…！

第十一話「club activities ?」（前書き）

かなり日が開いてしまい失礼しました！

今回はかなり短いです！
すみません…

では、本編をお楽しみ下さい！

第十一話「club activities ?」

「沙奈ちゃん暇だね～」

「暇ね」

皆さんどうも相澤です。とてつもなく久しぶりな気がしますね。

今、部室には沙奈ちゃんと私しか居ないのでかなり暇なんです。章人君は頭が悪いので追試、北村君も馬鹿なので追試です。一年生ちゃん達は今日は委員説明会かな？

それにしても暇です。私と沙奈ちゃんじゃセッションすらも出来ないし…。

「ねえ、愛実」

「え！？は？ほ、ほえ？何？」

急に沙奈ちゃんに呼ばれて驚いた私は少しテンパって変な返事をしてしまった。

「何か勝負事でもしない？負けた方は勝った方の言うことを１つ聞くことっていうのはどう？」

「ん～？良いけど何をやるの？」

「しりとりなんてどう？」

「それじゃあ決まりだね」

「それじゃあ私からいくわよ」

勝手に先手を取られました。じゃんけんとかで決めるんじゃないのかな？　ま、いいか。

「リボルビング」

「へ？『ぐ』？ぐ…ぐ…グルメ！」

「メイキング」

「また『ぐ』？ぐ…具合！」

「一回」

「『い』？い…イラスト！」

「研ぐ」

「また！？ぐ………グッピー！」

「ピッグ」

「グローバル！」

「ルクセンブルグ」

「グレード」

「ドッグ」

「グルーミング！」

「グッドタイミング」

「グループ！」

「プラグ」

「グランド！」

「道具」

「何なりとご命令して下さいませ！ぐ攻めに折れました！」

沙奈ちゃんとはしりとりなんてもうしないと心に誓い、負けを認めた。

「なんで？ぐならまだまだたくさんあるわよ？」

「勝てる気がしないから投了したの…」

「そう。じゃあ、明日私の買い物に絶対付き合ってほしいわ」

「そんなことなら大丈夫だよ！」

私は満面の笑みで答えた。

「そう…。ありがとう」

沙奈ちゃんも微笑み返してくれた。

明日が楽しみだな♪

今回はかなり短いけどここで終わり！

次回へ続きます！

第十一話「club activities ?」(後書き)

文章力がかなり衰えてしまった！

なので、次回の更新も遅くなってしまいます…

すみません…！

第十二話「ｓｈｏｐｐｉｎｇ?」（前書き）

更新が遅れてしまってすみません！！＞（＿　＿）＜

次回から気をつけます！

前もこんなことがあった気が……

何はともあれ、本編をお楽しみ下さい！

第十二話「ｓｈｏｐｐｉｎｇ？」

「これでよし！…っとと、ここズレてる…」

どうも皆さんこんにちは！相澤です！

今日は照りっ照りに晴れてます。窓の外の遥か上に雲一つ無い青空が一面に広がっています。絶好のお買い物日和です。皆さんも知っての通り、私は沙奈ちゃんにしりとりをして負けたので罰ゲームとして今日の沙奈ちゃんのお買い物に付き合う事になりました。

「ふぅ～、これでよしっ！」

それにしても皆さんはどう思いますか？罰ゲームが一緒にお買い物って…そんなことしなくても一緒に行ってあげるのにね。

姿見の前で着替え終え、おかしな所も直し終わりました。さてと、沙奈ちゃんとの待ち合わせ場所へ行って来ます。

部屋のから出るといつもと変わらない空間が広がっています。入学当時は本当に現実なのかと思ってしまいました。夢でも見ているのか…とね。前にも話した様にこの学園はかなりのお金持ち校なので、学生寮のスケールがかなり大きく、普通ではありえない程の高級感溢れる寮内となっています。部屋を出たら続く長い廊下だったり、私は利用した事がありませんが、大浴場も存在します。そして、外装…というか外見が高級ホテルそのものだったりします。１４階建てのホテルが2棟あり、１階と2階が繋がっていて、右が女子寮、左が男子寮と分かれていて、地元じゃ名所となっていたりします。食堂も平日の１０時～２０時の間は一般開放していて、お客様もか

なりの人数が足を運んで来ます。ちなみに学生達の寮として使っているのは４階から上です。そんなことを説明していたら、待ち合わせ場所の学生寮のロビーに付きました。

待ち合わせ時間は１１時で、待ち合わせ時間の３０分くらい前に着いたはずなのに、そこにはもう沙奈ちゃんが待っていました。

「沙奈ちゃんごめんね！待たせちゃった？」

私がそう言うと、「そんな気を使わなくていいわ。私もさっき着いたとこだから」といいます。

「ちょっと時間早いけど、もう行く？確か、電車に乗るんだったっけ？」

「そうね。こんなとこでしゃべってても時間を無駄にしているだけね」

心にグサッとくる事を平気で言ってきました。本当に毎回容赦のない沙奈ちゃんです…。

私達は寮を後にし、町へ出た。

・・・・・・・・・

「着いたわね」

電車に揺られて１時間弱、沙奈ちゃんに連れられてここまで来ました。

「沙奈ちゃん……私、こんなところ来るの初めてだよ？ていうか何でここに来たの？」

女の子同士の買い物なのに、ましてや沙奈ちゃんみたいな美人な人との買い物なのに……何故こんなところに居るんでしょう？

「私ね、なかなか人に言えない隠し事があったの。だけど、愛実なら受け入れくれるんじゃないかなって思ったの」

沙奈ちゃんはどうやら人一倍友達への期待値が高いみたいです。こんな遠回しにカミングアウトしなくてもいいのにね。困っちゃうよね。

「普通に言ってくれれば良かったのに…。でも、私も章人くんにも言ってない隠し事くらいはあるよ。それに、軽音部のみんなだってこれくらいの事じゃ沙奈ちゃんを嫌いになんてならないいんじゃないかな？」

「そう言ってくれると嬉しいわ。ありがとうね愛実」

沙奈ちゃんが笑顔でそう言いました。

「じゃあ、行こっか。ここまで来るのに時間かかっちゃったんだからいっぱい楽しまなきゃ損だよ！」

私は沙奈ちゃんの手を引き、その場を駆け出した。

「ちょっと！愛実！？そんな急いだら危ないでしょ！」

駅を出ると見渡す限り人だらけです。右にも左にも、人、人、人

のオンパレードです。私達は東京のある場所に来ています。

「私も来るのは初めてだけど凄い所ねここ」

そのある場所とは、

愛実＆沙奈「「ここが、秋葉原…」」

第十二話「ｓｈｏｐｐｉｎｇ?」（後書き）

うん。友情って難しいです…

こんな感じで大丈夫だったかな？

次回はなるべく早く更新したいと思います！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9941u/

Absolute Music

2011年11月26日21時00分発行